

幼児に対するしつけ方略の分析

高崎 文子

An analysis of parents' disciplinary attitudes in rearing young children

TAKASAKI Fumiko

(Received September 30, 2016)

Learning social rules is one of a developmental task for young children, and it's attained through parental support what is called "disciplines". However, in a situation of disciplining a child, parents may have different attitudes or methods, which is considered to be related with what sort of qualities the parent expects the child to develop.

The purpose of this study is to examine a relationship between the parent's disciplinary attitude and the considering point for child's development. 111 parents of kindergarten children answer following questions, 1) their daily disciplinary attitudes and 2) what qualities they consider most important when adopting such disciplinary attitudes. Their free answers were categorized "the parent's attitude" and "consideration point", then analyzed the relationship between two categories.

The results as follows that; parents who expect their children to "obey the rules" and "control their desires" take a "parental-lead" attitude; those who expect their children to develop "decision-making abilities" and "values" take a "child-initiated" attitude; while those who expect their children to develop "emotional experiences" take a "child-centered" attitude. As a conclusion that parents' attitudes in disciplining their children often vary depending on what quality the parent considers important for their children to develop.

Key words : disciplines, parents' attitudes, consideration point

1. 問題と目的

幼児期は社会的ルールを獲得することが発達課題のひとつであり、子どもの養育者は“しつけ”という働きかけを通して、子どもの望ましい行動の獲得やパーソナリティーの発達を支援している。そもそも“しつけ”は日常的に用いられる言葉であり、学術的に明確な定義がされているわけではないが、一般的には「大人から子どもに対してなされる、その社会で必要な習慣やものの考え方についての指導や訓練」(繁多, 1999) ととらえられている。心理学領域では養育者から子どもへの働きかけを“養育態度”として取り上げることが多い。“しつけ”は子どもに対する具体的な対応や行動であるが、“養育態度”はその行動の背景にある価値観も含めた概念である。いずれにしても、特に幼児期においては、日常生活の中での養育者と子どもとのやり取りを通して、望ましい考え方や振舞い方が伝達され、子どもはそれを内面化しながら社会化されていく。つまり子どもの社会的発達は、養育者によるしつけ方略や養育態度によって影響を受けると考えられる。

このような観点から、しつけ方略や養育態度と子どもの発達との関連を検証した研究は多い。たとえば、統制の強い養育態度や過度な受容は幼児の自己主張の発達を妨げること(森下, 2001; 戸田, 2006)や、非難的な養育態度は幼児の自己抑制の発達を妨げること(尾崎 & 小野, 2008)が示されている。また、しつけの際の理由づけのタイプによる子どもの愛他的行動への影響(首藤, 1985)や、親の統制の仕方による子どもの意欲への影響(姜 & 山崎, 2013)など、養育者が選択するしつけ方略が子どもの発達における様々な側面に影響を与えることが示されている。

このように、養育態度やしつけ方略と子どもの発達との関連については様々に検証されてきたが、養育者が用いる具体的なしつけ方略がどのように選択されているのかについては、あまり検討されていない。これは、多くの学術的研究においては“養育態度”に含まれる具体的な行動とそれを生じさせる養育者の価値観や考え方を混然一体にとらえてきたためだと考えられる。つまり、統制の強い養育態度は“子どもは親の統制のもと育てるべき”という考え方によるものであり、受容の強い養育態度には“子どもを受容し応答的に育てるべき”という

考え方によるものとみなされ、養育行動とその背景にある考え方については区別されてこなかった。しかし「しつけ」場面において養育者の行動とその行動の選択要因の関係はそれほど単純なものではないかもしれない。

養育態度の分類として代表的なものに、Baumrind (1966) による「権威型」「権威主義型」「許容型」の3タイプの分類がある。他にも戸田 (2006) は「受容/子ども中心主義」「統制/専制的」「一貫性のないしつけ」「服従的」「過保護」「甘やかし」「放任」の7タイプに分類している。養育態度のほとんどの研究においては養育者の子どもに対するコントロールのやり方という観点から、「統制」と「応答性」の2つの要素を軸に、その強弱の組み合わせによるタイプ分けが行われているといえるだろう。この観点からの分類は、養育者の子どもに対する行動パターンに注目したものである。その背景にある養育への考え方や行動選択の指針となる価値観については明示されていない。しかし、同じ「統制」であってもその程度がさまざまであるならば、その背景にある価値観や考え方も様々な程度や状況があると推測される。以上のことから、養育者のしつけ方略などの行動的側面と、その背景となる信念・期待・価値観などの心理的側面とは分けてとらえる必要があると考えられる。

子どもの養育において何を重視するかという価値観については、重視される発達課題の内容が文化によって異なることが明らかになっている。柏木と東 (1977) による日本とアメリカの幼児を持つ母親を対象にした研究では、日本の母親は「情緒的成熟」や「自立」をより早期に獲得するべき発達課題ととらえており、アメリカの母親は「言語による主張」と「社会的スキル」の獲得をより期待していることが明らかになった。さらに具体的なしつけ方略についても、日本の母親は「暗示や示唆などの間接的」で「気持ち」を強調する方略をとるのに対し、アメリカの母親は「直接的明示的」で「親の権威」によって統制するという方略をとるという違いがあることも示された (東, 1994)。ここから、日米それぞれの養育者が子どもの発達のどのような側面を重視したり、どのような大人になってほしいと期待するのかが、異なるしつけ方略を選択させているのではないかと推測される。

東らの研究は文化を背景にしたものであるが、同じ文化や社会に属していても養育者によって異なるしつけ方略をとる場合、その背景には個々の養育者が子どもの発達において何を重視しているのか、子どもにどのような特性や能力を身につけてほしいと思っているのかという考え方の個人差があるのではないかと考えられる。また、養育者が子どもの発達において何を重視するかは、子どもの発達段階やその時期の発達課題と密接に関連していると予測される。特に幼児期は、年齢や月齢に

よって身体的・認知的・社会的側面での能力やスキルに大きな差があるため、親が子どもにこのような特性や能力を身につけてほしいと考えていても、それを具体的なしつけ方略に反映させるのに適切な時期であるかどうかの判断が必要である。つまり、養育者の価値観や考え方は子どもの実態との調整を経て、具体的なしつけ方略の選択に至っているのではないだろうか。

以上のように、個々の養育者がとるしつけ方略や養育態度の背景には、養育者の価値観や考え方、子どもの発達の認知や子どもへの対応スキルなど様々な要因が影響していると考えられる。しつけ方略の個人差や選択要因が何に起因するのかについて明らかにすることは意義のあることであろう。そこで本研究では、日常的なしつけ場面において養育者が子どもに対してとる対応と、養育者が重視している教育方針を中心に、要因間の関連について分析を行うこととした。

2. 方法

調査対象者：熊本県内のA幼稚園に通う子どもの養育者111名。

手続き：仮想のしつけ場面を設定し、その場面においてどのような対応をするか、またその理由や重視していることについてたずね、自由記述で回答を求める質問紙調査を実施した。

質問紙は幼稚園を通じて養育者に配布し、回答後に幼稚園を通じて回収した。調査協力は任意であることを明示した上で協力を求め、期限までに回答を提出したことによって調査協力に同意したものとみなした。回答は108名から得られ、調査票の回収率は97.3%であった。

質問紙の内容：仮想のしつけ場面を設定するにあたり、多くの幼児と親が日常的に経験すると思われるしつけ場面について検討した。親の考えや価値観がより反映するように、公共の場で親と子どもの要求が対立する場面を設定し、幼児を持つ親の意見も取り入れ、最終的には「買い物中におもちゃを買って欲しいと子どもが言い出した」という場面を用いることにした。具体的には「あなたは、お子さんと一緒に買い物に来ています。必要なものを買って帰ろうとしたところ、お子さんが大きな声で『おもちゃが欲しい！買って！』と言って、その場で駄々をこね始めました。」という内容の場面を提示した。

この場面提示に続き、(1)あなたならお子さんに対して、どのような言葉をかけたり、どのような対応をしたりすると思いますか、(2)なぜそのような対応をとろうと思いましたか。その理由や子どもと接するうえで重視していることを教えてください、という2つの質問を記載した。それぞれの質問に対して、自由記述の回答を求めた。

他に、回答者である親の性別と年齢、子どもの性別と年齢、学年、出生順位をたずねた。

3. 結果

1. 調査協力者の属性の集計

調査協力者 108 名の性別は女性 95 名、男性 12 名、不明 1 名であった。また子どもの学年別の内訳は年少児の親 27 名、年中児の親 44 名、年長児の親 37 名であった。親の平均年齢は 38.0 歳 (SD=4.2, range 24-47)、子どもの平均月齢は 61.6 ヶ月 (SD=9.7, range 43-78) であった。学年別の親と子どもの年齢は Table1 に、学年別の子どもの性別と出生順位の内訳は Table2 に示した。

Table1. 学年別の親の平均年齢と子どもの平均月齢

| | 親年齢 | 子月齢 |
|----|------------|------------|
| 年長 | 38.0 (3.6) | 72.1 (4.4) |
| 年中 | 38.3 (4.4) | 60.1 (4.1) |
| 年少 | 37.4 (4.8) | 49.2 (3.6) |
| 計 | 38.0 (4.2) | 61.6 (9.7) |

※年齢不明者 (親 4 名、子 5 名) を除く平均値
※ () 内は標準偏差

Table2. 学年別の子どもの性別と出生順位の内訳

| | | 出生順位 | | | | 合計 |
|----|----|------|-----|-----|-------|-----|
| | | 第一子 | 第二子 | 第三子 | 第四子以降 | |
| 年長 | 男児 | 8 | 10 | 1 | 0 | 37 |
| | 女児 | 9 | 8 | 1 | 0 | |
| 年中 | 男児 | 12 | 9 | 3 | 1 | 44 |
| | 女児 | 5 | 10 | 3 | 1 | |
| 年少 | 男児 | 3 | 7 | 3 | 0 | 27 |
| | 女児 | 7 | 5 | 1 | 1 | |
| 計 | | 44 | 49 | 12 | 3 | 108 |

2. 自由記述データの整理

自由記述による回答を内容によってカテゴリー化した。まず、質問 (1) 駄々をこねた子どもへどのように対応するか、についての自由記述データは、ひとつの対応ごとにデータを切り分け、それぞれに内容を表すラベルをつけた。たとえば、「どうしてそれがほしいの? と理由を聞く。今日はおもちゃは買えないけど、今度サンタさんをお願いしようかと言う」という回答は、「どうしてそれがほしいの? と理由を聞く」「今日はおもちゃは買えない」「サンタさんをお願いしよう」の 3 つに分けた。これにそれぞれ<理由を聞く>、<親の方針の提示>、<代替案>のように内容を表すラベルをつけた。

以上の手続きより、親の対応として全部で 261 のデータが得られ、データごとにラベルづけをした上でカテゴリー化するため整理をしたところ、11 の小カテゴリーに分類された。さらに類似した概念でカテゴリー化し最終的に【親主導】【先延ばし】【子ども中心】【子ども主体】【その他】の 5 つの大カテゴリーにまとめられた。これらを「親の対応」のカテゴリーとし、各カテゴリーの例を Table3 に示した。

このうち【親主導】のカテゴリーには「今日は買わないよ」などの<親の方針>の提示をする対応、「お金を持っていない」など親の対応の<理由を説明>する対応、「いっぱい働かないと買えないんだよ」などの<社会的ルール>を示す対応の 3 つの下位カテゴリーが含まれており、親の考え方や判断基準に子どもを従わせようとする対応であると考えられた。【先延ばし】のカテゴリーには「お誕生日に買ってあげる」のように<代替案>を示す対応、「頑張ったときに買ってあげる」のように<条件付き>で要求を受け入れる対応の 2 つの下位カテゴリーが含まれており、今現在の欲求充足を先延ばしするような対応であった。【子ども中心】のカテゴリーには「どうしてそれが欲しいの?」のように子どもの要求の<理由を聞く>という対応、「それかっこいいよね」のように子どもの欲求に<共感>する対応の 2 つの下位カテゴリーが含まれており、子どもの気持ちに寄り添う対応であった。【子ども主体】のカテゴリーには「必要かどうか考えさせる」など子どもに状況について<考える機会を与える>という対応、「貯金を使ってもいいなら」など<子どもに判断させる>という対応の 2 つの下位カテゴリーが含まれており、子ども自身に考えさせたり判断させるなど主体性をもたせるような対応であった。【その他】には「ほかの興味あるものに誘導する」のように子どもの<気をそらす>対応、「その場を立ち去る」のように<物理的に離れる>の 2 つの下位カテゴリーが含まれており、その場では子どもの要求には直接対応しないものであった。本研究の目的である、しつけ場面における親の子どもへの対応を分析することを考慮し、その場で直接対応をしていない【その他】に分類されたデータは以下の分析には用いないこととした。

次に質問 (2) の対応の理由や重視していること、についての自由記述の回答も、内容ごとにデータを切り分けそれぞれにラベルをつけた。たとえば「買う前に考えさせるようにしている。我慢すること、お金は大切なことを教えたい」という回答は、「考えさせる」「我慢すること」「お金は大切なこと」の 3 つの重視内容に分けた。これにそれぞれ<考えさせる>、<我慢>、<大切にすること>のように内容を表すラベルをつけた。

以上のように全データを整理した結果、対応の理由や重視していることとして全部で 132 例が見いだされ、

Table3. 親の対応カテゴリー一覧

| 対応カテゴリー | 小カテゴリー | 対応例 | データ数 |
|---------|---------|----------------------------------|------|
| 親主導 | 親の方針 | 我慢しなさいと伝える／買わないよ | 86 |
| | 理由を説明 | お金を持ってない／おもちゃを買いに来たのではない | |
| | 社会的ルール | 大声で泣くと周りに迷惑をかける／いっぱい働かないと買えないんだよ | |
| 先延ばし | 代替案 | サンタさんをお願いしようね／お誕生日にね／パパをお願いしようか | 69 |
| | 条件つき | 頑張った時に買ってあげる | |
| 子ども中心 | 理由を聞く | どうしてそのおもちゃが欲しいの | 45 |
| | 共感 | これ欲しいんだね | |
| 子ども主体 | 考えさせる | 本当に必要？と考えさせる | 38 |
| | 判断させる | 貯金しているお金を使っても欲しいのなら、 | |
| その他 | 気をそらす | 他の興味あるものに誘導する | 23 |
| | 物理的に離れる | その場を立ち去る | |

Table4. 重視ポイントのカテゴリー一覧

| 重視カテゴリー | 対応の理由・重視していることの例 | データ数 |
|---------|---------------------------------------|------|
| 欲求の抑制 | 我慢できる人間になる／わがままにならないように／人生思い通りにならないから | 32 |
| ルール順守 | 約束を守ること／ルールを明確にするようにしている | 29 |
| 判断力 | よく考え判断できる子に育ててほしい／自ら考えて答えを出すように | 26 |
| 価値観の形成 | 物を大事にすることを学んでほしい／お金を無駄遣いをしないことを学ぶ | 21 |
| 情緒的経験 | 買ってもらった時の喜びを感じてほしい／気持ちに寄り添うように心がける | 20 |
| その他 | 目を見て話す／子どものためになるかならないか | 4 |

類似する内容を集約しながらラベルづけした結果、【欲求の抑制】【ルール順守】【判断力】【価値観の形成】【情緒的経験】【その他】の6つにカテゴリー化された。これらを「重視ポイント」のカテゴリーとし、カテゴリーの内容例を Table4 に示した。

このうち【欲求の抑制】のカテゴリーには、“我慢することを覚えてほしい”“人生思い通りにならないから”などが含まれ、子どもが要求をコントロールできるようになることを重視するものであった。【ルール順守】カテゴリーには、“ルールを明確にするようにしている”など親と取り決めた決まりに従うことを重視するものであった。【判断力】のカテゴリーには、“自分で考え判断する”“冷静に対応できる人格”など、自分で考える力をつけることを重視するものであった。【価値観の形成】のカテゴリーには、“お金の無駄遣いをしないことを学ぶ”や“ものを大事にする心を育てる”など、何を大事にするべきかという価値観を身に着けることを重視するものであった。最後に【情緒的経験】カテゴリーは、“買ってもらった時の喜びを感じてほしい”“ものを与えるより愛情をそそぐ”など、子どもの豊かな情緒的経験を重視するものであった。【その他】として“目を見て話す”“子どものためになるかならないか”など、具体的な対応の仕方に関する内容や対応の判断基準など、発達期待ではない内容が分類された。本研究の目的である、親の発達期待を分析するということを考慮し、こうなしてほしいという期待についての内容ではない

【その他】に分類されたデータは以後の分析からは除外することとした。

3. 対応パターンの特徴について

「親の対応」「重視ポイント」ともに、一人の回答には複数の内容が含まれているケースもあったため、一人の回答におけるデータの出現順ごとに「対応1, 対応2, 対応3・・・」「重視1, 重視2, 重視3・・・」と番号をふりそれぞれの出現数を集計した。

その結果「親の対応」カテゴリーでは、対応1は108件で全回答者が何らかの対応について記述していた。このうち対応1のみの回答は108名中25名(23.1%)であった。複数の内容の記載については、対応2は82件、対応3は50件、対応4は20件あった。以下の分析では“対応1”と“対応2”までのデータを用いることとした。

親が子どもに対してどのような対応をとることが多いのかを調べるために、「親の対応」カテゴリーの“対応1”と“対応2”のデータを組み合わせてクロス集計し (Table5 参照)、対応パターンの特徴を分析するためカイ二乗検定を行った。その結果、“対応1”と“対応2”の組み合わせパターンの出現に差のある傾向がみられた ($\chi^2(20)=29.49, p<.10$)。残差分析の結果、“対応1”のみの回答の場合【先延ばし】の対応が多く、【子ども中心】の対応が少ないことがわかった。“対応1”と“対応2”の組み合わせとしては、【親主導】の後に【先延ばし】と、【子ども中心】の後に【親主導】もしくは【子ども主体】の出現パターンが有意に多かった。また【親主導】

Table5. 親の対応パターン

| | 対応1のみ | 対応2 | | | | |
|--------------|----------|-----------|-----------|-------|----------|-----|
| | | 親主導 | 先延ばし | 子ども中心 | 子ども主体 | その他 |
| 親主導 (N=46) | 12 | 10 | 13 | 5 | 4 | 2 |
| 子ども中心 (N=30) | 1 | 11 | 7 | 4 | 7 | 0 |
| 先延ばし (N=19) | 8 | 5 | 2 | 1 | 0 | 3 |
| 子ども主体 (N=12) | 4 | 1 | 2 | 2 | 2 | 1 |
| その他 (N=1) | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 計 | 25 | 28 | 24 | 12 | 13 | 6 |

※太字は残差分析で有意であったもの

Table6. 重視ポイントの組み合わせ

| | 重視1のみ | 重視2 | | | | | 計 |
|--------|-----------|----------|-------|-----|----------|-------|----|
| | | 欲求の抑制 | ルール順守 | 判断力 | 価値観の形成 | 情緒的経験 | |
| 欲求の抑制 | 14 | - | 3 | 1 | 5 | 2 | 25 |
| ルール順守 | 15 | 2 | - | 1 | 2 | 1 | 21 |
| 判断力 | 14 | 4 | 0 | - | 2 | 0 | 20 |
| 価値観の形成 | 5 | 1 | 2 | 2 | - | 2 | 12 |
| 情緒的経験 | 10 | 0 | 3 | 2 | 0 | - | 15 |
| 計 | 58 | 7 | 8 | 6 | 9 | 5 | 93 |

※太字は残差分析で有意であったもの

の後に重ねて【親主導】と、【子ども主体】の後に【親主導】と、【先延ばし】の後に【子ども主体】もしくは【先延ばし】の出現パターンは有意に少なかった。

4. 重視ポイントの特徴について

「重視ポイント」についても、出現順にふったの番号ごとに出現数を集計したところ、重視1の回答は93件、重視2まで挙げた回答は35件であった。このうち重視1だけの回答は58件であった。親の子どもへの対応においてどのようなことが重視されているのかを調べるために、「重視1」と「重視2」のカテゴリーの組み合わせ出現数を集計し（Table6参照）、カイ二乗検定を行った。その結果、「重視1」と「重視2」の組み合わせパターンの出現に差のある傾向がみられた（ $\chi^2(20)=30.88, p<.10$ ）。残差分析の結果、「重視1」のみの回答の場合【ルール順守】の内容が有意に多く、【価値観の形成】は有意に少なかった。複数の重視ポイントを挙げている場合は、【欲求の抑制】と【価値観の形成】もしくは【判断力】の組み合わせが多かった。

5. 親の対応と重視ポイントの関係について

親の子どもへの対応と対応の際重視しているポイントの関連を調べるため、「親の対応」カテゴリーの「対応1」「対応2」と、「重視ポイント」カテゴリーの「重視1」「重視2」のデータを用いて多重対応分析を行い、各要因の関係の近さを Figure1 に示した。図中でプロットされた位置が近いほど、要因間の関連が強いことを示している。

“重視1”のカテゴリーを中心に要因間の関連の近さをグループ分けしていくと、主に【ルール順守】【欲求の抑制】重視に近い要因のまとまり、【価値観の形成】【判断力】重視に近い要因のまとまり、【情緒的経験】の重視に近い要因のまとまり、の大きく3つのグループに分かれると考えられた。まず【ルール順守】【欲求の抑制】を重視している養育者は【親主導】の対応か【先延ばし】の対応をしていることが見てとれた。【価値観の形成】【判断力】を重視する養育者は【子ども主体】の対応をしていることが見てとれた。【情緒的経験】を重視する養育者は【子ども中心】の対応をしていることが見てとれた。

さらに、親の子どもへの対応と重視していることが、子どもの発達段階と関わりがあるのかを調べるために、「親の対応」カテゴリーの“対応1”と、「重視ポイント」カテゴリーの“重視1”と、子どもの学年のデータを用いて、多重対応分析を行った。各要因の関係性を Figure2 に示した。

その結果、年少児と年中児に対しては【ルール順守】【欲求の抑制】を重視し、子どもに対して【親主導】の対応をしているという関連が示された。年長児に対しては【判断力】を重視し、【子ども主体】の対応をしているという関連が示された。

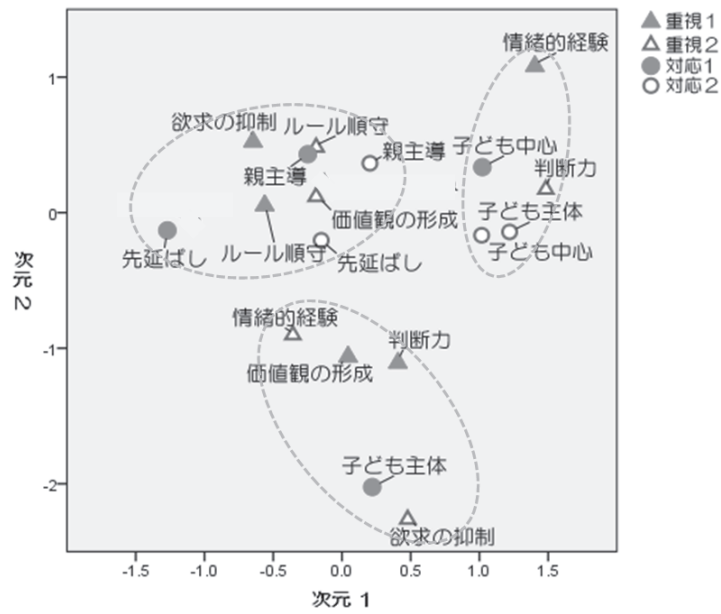


Figure1 親の対応と重視ポイントの関連の多重対応分析結果

4. 考察

本研究の目的は、幼児に対するしつけ場面において、養育者の子どもの発達に関する価値観や考え方と具体的なしつけ方略にどのような関連があるかについて分析することであった。日常でよく見られる買い物の途中に子どもが駄々をこねる場面を設定し、その際の親の対応とその理由や重視していることについてたずね、幼児の養育者のしつけにおける重視ポイントと具体的対応

について調査した。

まず駄々をこねた子どもへの親の対応をカテゴリー化した。これは養育者が子どもにどのような態度で接しているかという“しつけ方略”を表していると考えられた。親の対応のうち親の考えに子どもを従わせる【親主導】の対応が最も多くみられ、次に子どもの欲求や気持ちに寄り添う【子ども中心】の対応、欲求充足を別の機会に延期する【先延ばし】の対応、子どもにどうするべきかを考えさせる【子ども主体】の対応の順であった。

多くの養育者が子どもへの対応に複数の方略を組み

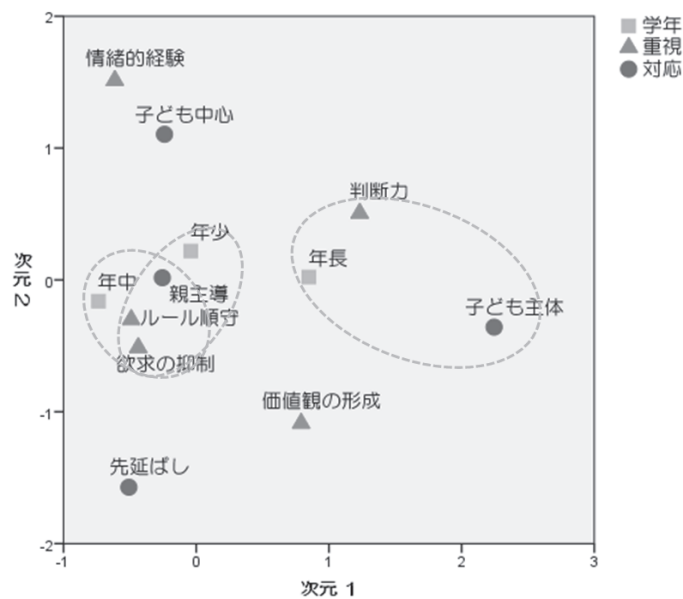


Figure2 学年と対応・重視ポイントの関連の多重対応分析結果

合わせて用いている中、1つの対応のみに言及した養育者は23.1%であった。この1つの方略のみ用いる場合は【先延ばし】の出現数が有意に多くみられたが、買い物の途中という公共の場なるべく単純な対応で済ませたいという養育者の意図が背景にあり、対立する親子の要求の折衷案として【先延ばし】でその場をやり過ごそうとしているのではないかと考えられた。

複数の対応を用いる場合は最初に、親の姿勢を示す【親主導】の対応をする場合と、子どもの欲求に寄り添う【子ども中心】の対応をする場合に分かれることが示された。まず【親主導】の対応をする養育者は、親の考えを示し子どもの要求が通らないことを伝えた後に、子どもの欲求不満に対処するために【先延ばし】を組み合わせる方略をとることが多かった。【子ども中心】で先に子どもの気持ちに寄り添う対応をする養育者は、その後【親主導】か【子ども主体】の対応を選択することが多かった。いったん子どもの欲求に耳を傾けたとしても最終的には【親主導】で子どもの要求が通らないことを示すか、子どもにどうするべきか考えさせる【子ども主体】の方略をとるかというパターンに対応が分かれることが示された。親が子どもに望ましい振る舞いを求める“しつけ”場面においては、親子の要求が対立する場合が多い。そのような状況で、養育者は複数の方略を用いて、いろいろなアプローチで子どもに対応しようとしていると考えられる。そのしつけ方略としては【親主導】から【先延ばし】パターンは親の言うことをきかせることに焦点を当てた方略、【子ども中心】から【親主導】パターンは子どもの声に耳を傾けつつ最終的には親のやり方を通す方略、【子ども中心】から【子ども主体】パターンは子どもの要求を聞き判断も子どもにさせる方略、というように養育者と子どもとの関係をどのように位置づけるかについて特徴が異なることが示された。

従来の養育態度の類型化と比較すると、「統制」と「応答性」の軸によって対応を分析できるという点では一致すると考えられる。たとえば【親主導】の対応は「統制」が強く「応答性」が弱い養育態度であり、逆に【子ども中心】の対応は「応答性」が強く「統制」が弱い養育態度であるといえるだろう。また【先延ばし】は「統制」も「応答性」も中程度よりは強めであり、【子ども中心】は「統制」も「応答性」も中程度よりは弱めであると考えられるのではないだろうか。ただし、単純に“統制”が強いか“応答性”が強いか、またその組み合わせによって特徴づけられるというだけではなく、【親主導】の後に【先延ばし】や【子ども中心】の後に【親主導】のように異なるタイプの対応を合わせて用いる場合も少なくないことから、養育態度の実態を単純な類型化に落とし込むことについては議論の余地があると考えられる。

次に、子どもへの対応における重視ポイントを分析し

たところ5つのカテゴリーが見いだされた。これは養育者が子育ての上で大事にしている“教育方針”や“発達期待”を表していると考えられる。このうち欲求のコントロールができることを重視する【欲求の抑制】が最も多く挙げられ、次にルールが守れることを重視する【ルール順守】、考える力を身につけることを重視する【判断力】、大切にすべきことを学ばせることを重視する【価値観の形成】、豊かな情動経験をさせることを重視する【情緒的経験】の順であった。養育者は発達課題のうち、欲求をコントロールできるようになることを最も期待していることが示された。

重視ポイントの一つだけ挙げている場合は、【ルール順守】カテゴリーの出現数が有意に多かった。複数の重視ポイントを挙げている場合は、【欲求の抑制】の後に【価値観の形成】パターンと、【判断力】の後に【欲求の抑制】パターンの出現数が有意に多かった。このことから、幼児の養育者が子どもへのしつけとして重視しているのは我慢ができること、ルールを守れることなどの欲求や行動の自律と、適切な判断を自分でできることであると考えられた。特に【欲求の抑制】は単にわがままを言わないというだけではなく、ものを大事にするという価値観や自分で考えるという能力の獲得などと結びつけてとらえられていることが明らかになった。

親の重視ポイントと実際の対応として現れるしつけ方略との関連については、主に3つのパターンが見いだされた。子どもの発達において【欲求の抑制】【ルール順守】を重視する養育者は【親主導】の方略をとるという関連が示された。我慢することやルールを守ることなどは親が求める規律であるため、子どもの欲求とは対立しやすいが、親の意図に従わせることで子どもが欲求を抑え規律に従うという自律能力の発達を促していると考えられる。【価値観の形成】【判断力】を重視する養育者は【子ども主体】の方略をとることが示された。何が大事かを自分で考えて判断力をつけることを期待しているため、子どもに考える機会を与えることで主体的な思考や行動の発達を促しているのだと考えられる。【情緒的経験】を重視する養育者は【子ども中心】の方略をとることが示された。子どもの欲求や思いが大人の意図と異なるものであってもそれを否定したり抑えつけたりせず、子どもが素直に感じる情緒的経験を受容したり共感することで人格的な発達を促しているのだと考えられる。以上のように、養育者の重視する価値観や子どもへの発達期待によって、同じしつけ場面でも対応が異なることが明らかになった。

また子どもの年齢によってしつけ場面での対応は変化していくことも示された。養育者が子どもに期待することや重視するポイントは、年少児と年中児では【欲求の抑制】【ルール順守】だが年長児では【判断力】を

重視するというように子どもの発達段階によって変化していた。それに伴って養育者の対応も【親主導】から【子ども主体】の対応をするようになることが示された。これは養育者が子どもの発達段階やそれに合わせた能力やスキルの獲得状況を十分に認知したうえで、しつけ方略のような行動選択をしていることを表している。

このことから、養育者のしつけ方略はそれぞれの価値観や考え方との関連が強いものの、子どもの発達の状況を見ながら重視する内容を変化させているといえるだろう。つまり養育者のしつけ方略は横断的に見れば何を重視するかという価値観の個人差に規定されるが、縦断的に見れば子どもの発達などの変化に合わせて柔軟に変更されていくのだと考えられる。このような養育者の柔軟な対応は、養育行動のスキル獲得という、養育者としての発達という視点からも解釈できるかもしれない。養育者が個人の教育方針や価値観に縛られて、子どもの発達の変化を考慮した方略をとれない場合は、しつけなどの子どもへの対応が硬直化し、それが子どもの社会化へマイナスの影響を与えることも考えられる。どのようなしつけ方略や養育態度が望ましいのかを考える際に、ある特定のパターンの望ましさを検証するよりも、養育者のしつけ方略の背景にある教育方針や発達期待が、その発達段階の子どもの実態に適合しているか、という観点からとらえていくことが有効なのではないかと考えられる。今後の課題として、子どもの側から見たより適切な対応について分析していく必要があると考える。

参考文献

- Baumrind, D. (1966) Effects of authoritative parental control on child behavior. *Child Development*, 7, 888-907.
- 東洋 (1994) 日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて。東京大学出版会。
- 柏木恵子・東洋 (1977) 日米の母親における幼児への発達期待及び就学前教育観。 *教育心理学研究*, 25, 34-51.
- 姜信善・山崎悠希 (2013) 子どもの認知する親の養育態度と意欲との関連について－養育態度を「統制」の仕方からとらえて－。 *富山大学人間発達科学部紀要*, 8, 9-22.
- 繁多進 (1999) しつけ。中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田裕二 (編)。 *心理学辞典*, 有斐閣, 345.
- 森下正康 (2001) 幼児期の自己制御機能の発達 (3) －父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるか－。 *和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要*, 11, 87-100.
- 尾崎康子・小野由加利 (2008) 幼児期における自己制御機能発達に及ぼす父母の養育態度の影響。 *富山大学人間科学研究実践総合センター紀要*, 2, 39-44.
- 首藤敏元 (1985) 幼児の愛他行動に及ぼす理由づけの効果。 *教育心理学研究*, 33, 243-247.
- 戸田須恵子 (2006) 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について。 *北海道教育大学釧路校研究紀要*, 38, 59-69.